

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2021年6月20日

No.136



「郷土の森」建設予定地に復元工事中の、旧府中尋常高等小学校校舎。左に見えるのは、現在観光物産館となっている場所にあった都立青年の家。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その1…旧府中尋常高等小学校校舎
- 3 最近の発掘調査
8.5メートル以上もある長大な竪穴建物跡
- 4-5 NOTE
江戸時代の遠馬と六所宮
- 6 府中の史料に見る 江戸時代の流行病
⑤コロリの襲来
- 7 令和2年度寄贈・寄託資料一覧
令和2年度利用状況
新刊案内
- 8 太陽系惑星ツアー①
①水がないのにどうして「水」星？

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在8棟の建物が移築復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を8回シリーズで紹介します。

その1…旧府中尋常高等小学校校舎

上の写真は、郷土の森（府中市郷土の森博物館の旧施設名）がオープンする5年前の1982年（昭和57）、復元工事中の旧府中尋常高等小学校校舎です。付近を通る下河原緑道から、田んぼとともに撮影されています。現在、田んぼ部分には博物館本館があるため、同じ撮影地点からこの建物を見ることはできません。

復元建物、郷土の森に建つ

その1… 旧府中尋常高等小学校校舎

正門から郷土の森博物館の敷地に入ると、右手に博物館本館が見えます。そして左手に真っ先に見えるのがこの建物です。もとは府中町立府中尋常高等小学校として、1935年（昭和10）9月、現在の寿町に建てられました。木造2階建てで、一般教室35室、特別教室4室、来賓室・応接室・教員室等、延床面積が6,270㎡あり、建築当時は北多摩郡随一の規模を誇っていました。1947年に府中第一小学校と改称されてからも、30年以上使用され続けましたが、老朽化のため新校舎建設が計画され、移築復元による再活用が模索されました。

その頃の府中市では、複数の歴史的建築物を移築復元した展示施設を建設する構想がありました。郷土の森博物館の原型ともいえるもので、1975年頃に作成された「東京都府中市民家園計画」という計画書が残されています。この中で、小学校校舎は、その施設の中核を担う存在とされ、校舎全体を移築復元し、リフォームした上で博物館本館として活用することが提言されています。しかし、大規模な木造建築をすべて移築復元することは困難だったようです。1979年、計画がより具体化され、府中市制25周年を記念して「府中市郷土の森建設構想」が発表された際には、本館を新たに建設し、付近に校舎の一部を移築する、現在の郷土の森博物館につながる計画に変更されました。

「府中市郷土の森建設構想」が発表されたのと同年、寿町の校舎は解体され、部材の一部が保存されました。それをもとに現敷地内に移築復元されたのは、3年後の1982年のことでした。

実は復元に再活用できる古材が少なかったため、新材を多数使用するとともに、補強を加え耐震性を高めています。復元建物としては移築前を完全再現する方法も考えられますが、この建物では昔の木造校舎を再現するだけではなく、当初案通りに、展示施設としても活用できるようにす



解体直前（1979年頃）の小学校（当時は府中第一小学校）校舎。コの字型の校舎の中心部分のみが郷土の森敷地内に移築復元された。

ることを目指しました。展示ケースやパネル等を新たに整備し、教科書や教材、児童の描いた絵といった教育資料を展示しました。それだけでなく、1995年（平成7）には2階に多摩川や多摩川流域の自然等を学べる「多摩川ふれあい教室」が、2003年には1階に府中ゆかりの詩人を紹介した「村野四郎記念館」が、教室・応接室・校長室を改装して設置されました。昨年には教育資料の展示もリニューアルし、学校給食の再現等が追加されました。つまり、復元建物でありながら、部屋ごとに個性的な見学や体験の場にもなっている、活用しやすい存在となったといえるでしょう。

ちなみに、ほかの復元建物の建設工事は1985年から始まりましたから、約3年間、小学校校舎だけが敷地内にポツンと建っている状況でした。その後1987年のオープンに向けて本館やほかの復元建物が徐々に姿を現していきます。8棟の復元建物が揃ったのはオープンから6年目の1993年のことでした。（佐藤智敬）



1982年、復元工事完了後。当時周囲にはフェンスが巡らされており、ほかの建物がない状態。現在はこのアングルでの撮影はほぼ不可能。

8.5メートル以上もある

長大な竪穴建物跡

八幡町二丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



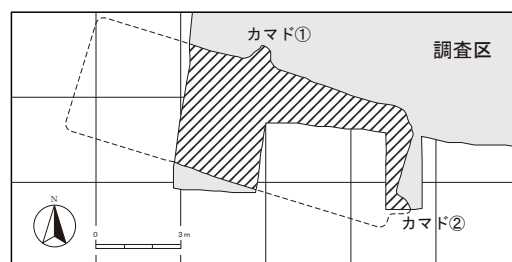
長大な竪穴建物跡

奈良・平安時代の武蔵国府では、住人の多くが竪穴建物で生活をしていました。その構造は、地面を四角形に掘り込み、その穴の上に藁や茅で葺いた屋根を架けたものと考えられています。掘り込みの大きさは、一辺が4 m程度のものが多いのですが、今年、八幡町2丁目の発掘現場で規模が通常よりも長大な竪穴建物跡（SI71）が見つかりました。

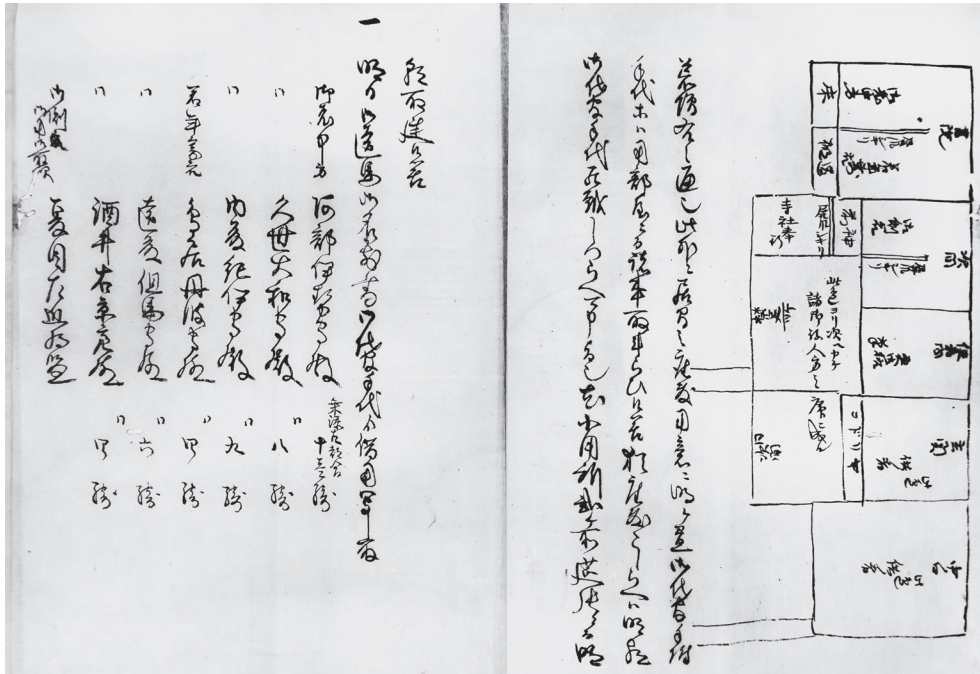
この竪穴建物跡が発見された場所は、役所が建ち並ぶ国衙の所在地（現 大國魂神社）から東へ740 m離れた場所にあたります。竪穴建物跡の規模は調査区外へおよぶため不明ですが、短辺（南北）が4.2 m、長辺（東西）が8.5 m以上もあり、北側の壁と東側の壁にはカマドが造りつけられていました。長辺の規模は、北壁のカマドを中心に西側へ折り返すと約12 mにまで広がる可能性があります。この竪穴建物の時期は、出土遺物の観察から8世紀前葉と見られます。

このような長大な竪穴建物は大変珍しく、武蔵国府の調査では11棟しか見つかっていません。その分布は、国衙の北隣と北西の方向に集中しており、8世紀前半と、9世紀後葉～10世紀中葉に造られたと推定されます。長大な竪穴建物には、カマドや炉を持つものと持たないものがありますが、居住のみが目的の建物とは様相が異なるため、複数の工人が同時に作業するための施設と捉えています。その他の遺跡での出土事例を見ても、地方官衙遺跡からの発見例が多く、国や郡に管理・統制された共同の生産施設ではないかと考えられています。

今回発見した竪穴建物跡からは生産に関わる遺物が出土しておらず、何をつくっていたのかは今のところ明らかではありません。しかし、この竪穴建物が稼働したとみられる8世紀前葉は、武蔵国衙の成立期に当たるので、その造営に関係し、国府に集住した工人たちが作業をしていた施設だったのかもしれない。



長大な竪穴建物跡



安政3年の遠馬の記録（当館寄託 大國魂神社文書）

▼ はじめに

江戸時代の軍事訓練のひとつに、遠馬があります。その名のとおり、予定されたコースを馬で遠方まで行くことで、競技や観光を兼ねた娯楽として的一面もありました。

江戸時代後期になると、府中における大規模な遠馬の記録が見られるようになります。ここではその中から、安政3年（1856）3月16日に、老中・若年寄をはじめとする幕閣の主要人物が多数訪れた事例をご紹介します。

▼ 急な遠馬の連絡

この遠馬の参加者は、老中の阿部伊勢守・久世大和守・内藤紀伊守、若年寄の鳥居丹波守・遠藤但馬守・酒井右京亮ほか、御側衆（2人）・大目付（2人）・寺社奉行（3人）・勘定奉行（3人）・町奉行（1人）など、幕府の中樞を担う錚々たる面々で、馬数100頭という大規模なものでした。江戸から小金井辺りを經由して府中の六所宮（大國魂神社）に参拝、その後百草村（日野市）の松連寺へ足を延ばして帰城するコースです。府中は、六所宮参拝後の昼食と松連寺からの帰路に

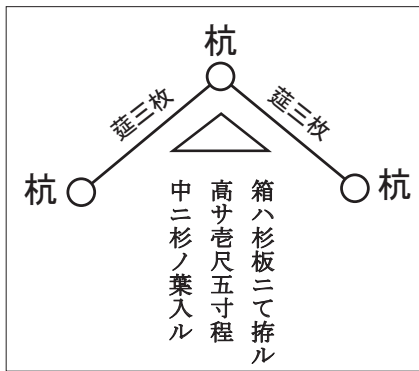
おける小休の場となっていて、この遠馬のメインスポットだったと思われます。

ところが、来訪の知らせが代官所から届いたのは、なんと実施前日の明け方でした。これだけ重要な人物が訪れるのに、1日前とは…、と驚きを禁じ得ませんが、実は同じ月の18日に御三卿の田安德川家当主・慶頼一行の遠馬があり、3月初旬から来宿に向けて準備が進められていたのです。このため、道の整備や障害物の排除など、実施のための環境はほぼ整っており、急な連絡はそれを踏まえてのことだと思われます。当時のトップの政治家たちが挙って出かけるわけですから、不測の事態を避けるためにも情報の周知は直前が好ましかったのかもしれない。

▼ 事前準備

それでは、実施までの1日でどのような準備が行われたのでしょうか？

まずは、馬を繋いでおく場所の確保です。府中宿の人々により、六所宮の鳥居内側の西方へ100頭分の馬立場が設置され、飼料の調達も行われました。



仮設トイレの造作図

の棟札を本殿入口近くの小机の上に飾り、拝殿と幣殿の中通りに葎を敷いて、草履のまま通り抜けができるようにしました。

一方、神主宅でも表座敷を掃除し、道具類などを残らず片付けています。興味深いのは、2か所に小用のための簡易トイレが仮設されていることです。上の図は、その造り方を記した史料から作成したもので、3か所に杭を打って葎で覆い、目隠しをしています。その内側には、高さ1尺5寸（約45.5cm）の杉板で拵えた箱に杉の葉を入っていますが、杉が使われているのは消臭効果を期待してのことかもしれません。

そして、夜も更けた午後10時頃には、勘定方の出役と代官手代が神主宅に訪れて、昼食時の座敷割りをしています。書院に老中・若年寄、書院次間に御側衆（2人）を配置、奥右筆（3人）と寺社奉行（3人）は個別の空間を与えられますが、それ以外の人々は2つの座敷を共用したようです。実は、当初寺社奉行衆もそこに交じるはずだったのですが、直接の支配筋であることを理由に六所宮側から別室にしたいと申し出たのです。このような配慮もあってか、神主の猿渡容盛は、寺社奉行のひとりから「急な遠馬でさぞ大変だっただろう」と、労いの言葉をかけられています。

▼ 参拝と小休の様子

遠馬一行が府中宿に到着したのは16日の午前10時頃で、そのまま六所宮の境内に入りました。老中・若年寄衆は本殿の中で拝礼、その他の面々は縁側で拝礼を済ませています。本殿では、前日に飾っておいた寛文の棟札を老中の内藤紀伊守が見て、再建の際に奉行を務めた久世広之の子孫である同職の久世大和守広周に、「大和殿、大和殿」と呼びかける一幕もありました。

六所宮では参拝に備え掃除をして、通行の障害にならないように奉納灯籠をすべて片付けています。また、寛文7年（1667）再建

六所宮での参拝は本殿のみで、ほかを見ることなく昼食の場である神主宅へ向かいました。幕の内仕立ての弁当を用意したのは、番場宿（宮西町）の旅籠屋・松本屋で、老中・若年寄・御側衆の分は黒塗り膳、それ以外の人々には笹折で出されています。

松連寺から江戸に向かう帰路の小休時には、今も大國魂神社に残る家康の寄進状や、2代秀忠の直筆の書状などを書院の縁先で観覧する時間が設けられました。そこでは、阿部伊勢守が秀忠の書状の内容について猿渡容盛に直接質問するなど、格式ばらない交流が行われたようです。

このように、恙なく遠馬は進行していきましたが、容盛にはひとつの後悔が残りました。それは本殿の西北にある、元和4年（1618）造営の東照宮参拝に関することです。この件について容盛は、「最初の打合せでは、小休の後に六所宮へ向かうということだったので、事前に東照宮への参拝の有無を尋ねようと思っていた。ところが、先に六所宮への参拝が行われ、無理に東照宮へ案内するわけにもいかず、参拝が終了してしまったことは不本意の至りである」と、忸怩たる思いを書き記しています。

▼ 遠馬の終了

遠馬の一行が退去した後、代官所から六所宮に茶代として銀2枚（86匁）が下賜されました。勿論、これは謝礼のようなもので、この遠馬にかかった弁当代などの諸費用は別途支払われたと推測できます。府中宿の人々にとっては、準備に駆り出されるなどの負担があるものの、まとまった収益を得る機会でもあったと思われる。

これにより無事に遠馬は終わりましたが、容盛には最後にやらなければならないことが残っていました。遠馬から9日後の25日から27日にかけて、容盛は老中・若年寄と寺社奉行の計9軒の屋敷を回っています。送迎の際の粗略を詫びるとともに帰宅後の御機嫌伺いをするため、これを終えるまでは完了とは言えなかったのです。

府中に残る遠馬の記録には、このほかに文政13年（1830）と安政3年の田安德川家に関わるものがあります。これらの詳細については「江戸時代後期の遠馬と府中」として『府中市郷土の森博物館紀要』第34号に所収していますので、興味のある方は、そちらもあわせてご覧ください。

府中の史料に見る

江戸時代の流行病

⑤コロリの襲来^{しゅうらい}

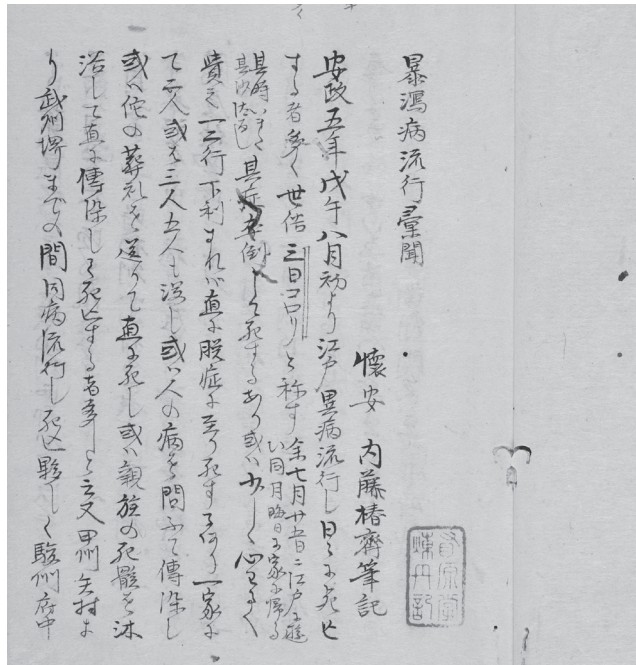
インドのガンジス河流域など、限られた地域の風土病だったコロリ（コレラ）が世界に広がったのは、ヨーロッパ人のインド進出が原因でした。その最初のパンデミックは1817年に始まり、5年後の文政5年（1822）8月には日本へ上陸。対馬（長崎県対馬市）から長門（山口県長門市）に入り、九州・中国地方で猛威をふるい、大坂で多くの死者を出しました。しかし、この時は箱根の山を越えることなく10月に収束したため、江戸には被害が及びませんでした。

最初の流行では事なきを得たものの、それから36年後の安政5年（1858）7月末、3度目の世界流行がついに江戸に到達します。今回は、長崎に停泊していたアメリカ軍艦・ミシシッピ号の乗組員から始まり、江戸では8月初旬から感染者が増え、同月末には蔓延したといえます。

このような状況は、江戸から約8里（32km）に位置する府中にとっても対岸の火事ではありません。右上の史料は本宿村小野宮（住吉町）の漢方医・治右衛門がコロリ患者を診察した際の記録です。医療に関わることでだけでなく、当時の様子や風聞などが詳細に記されていますので、この史料をもとに、安政5年の府中近辺における流行について見てみましょう。

治右衛門が中河原村（住吉町）の文蔵宅まで、コロリと思しき患者を往診することになったのは、8月7日のことです。患者は相模国小山村（神奈川県相模原市）から江戸に働きに出ていた吉兵衛という人物で、母親が病気だという知らせを受けて、親戚の者と2人で郷里に向かっている途中でした。

吉兵衛を診察した治右衛門は、激しい吐き気や下痢の症状を有する「霍乱」と判断し、その処方（ほどこ）を施して帰宅しました。七つ時（午後4時頃）再び呼ばれて行ったところ、重症化していたため蘭方医を勧めましたが、生憎不在で診察をうけることはできませんでした。そして、翌朝五つ半時（午前9時頃）、治右衛門が再訪した時は、すで



コロリ患者診察の記録
（本宿小野宮 内藤治右衛門家文書）

に亡くなっていたのです。

治右衛門によると、吉兵衛は喉の渴きから大量に水を飲み、胸から腹にかけての痛みで悶え苦しんでいたといえます。また、手足が冷えて脈は弱く、両足が激しく引きつり、すでに死人のような顔色だったとありますから、かなりの劇症です。

江戸での流行が始まって間もないからか、診察時の治右衛門は、コロリの流行を知りませんでした。ところが2日後の夕方、府中の甲州屋で甲府と江戸の人から両所で流行している病気の話（ありさま）を聞くことになります。その有様と吉兵衛の症状がよく似ていると感じた治右衛門は、それらが文政期に流行したコロリと類似していることに気づきます。そこで蔵書から、オランダ商館の医員・シーボルトによるコロリの記録を探し出して読んでみると、まさに吉兵衛の症状と合致。ここから、治右衛門のコロリに関する情報収集や治療法の検討が始まりました。それを記録したこの史料にはどのようなことが書かれているのか…、それはまた次号で紹介したいと思います。（花木知子）

令和2年度
寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	内藤 治	本宿小野宮内藤治右衛門 家文書Ⅱ	歴史	一括	寄贈
2	内藤 治	掛軸	歴史	8点	寄託
3	内藤 治	内藤家道具・衣類	民俗	一括	寄贈
4	土屋栄一	かき氷器・鯉節けずり	民俗	2点	寄贈

令和2年度
利用状況

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数 252日	大人	114,353	390	36,933	151,676
	子供	9,374	3,663	26,663	39,700
	小計	123,727	4,053	63,596	191,376
上記のうち プラネタリウム観覧者 投映日数 237日	大人	18,469	291	3,819	22,579
	子供	7,781	3,609	2,931	14,321
	小計	26,250	3,900	6,750	36,900

※コロナウイルス感染症の流行に伴い、4/1～6/1まで休館。
※プラネタリウムは6/19再開。定員は6/19～26は35人、6/27～
10/2は70人、10/3以降は100人に制限。

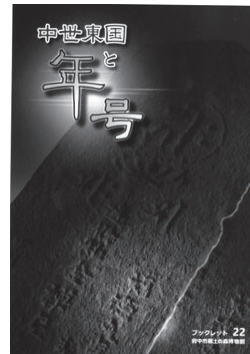
📖 新刊案内

＊『府中市郷土の森博物館紀要』34号 400円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・日吉町出土の菱形文土器 [湯瀬禎彦]
- ・武蔵御嶽山の中世瓦 [深澤靖幸]
- ・〈報告〉「くらやみ祭」を題材とした社会科学習について
—小学校社会科第4学年実践報告— [綾邊香代子]
- ・〈報告〉府中市郷土の森博物館における鳥類標識調査
について [吉成才丈]
- ・多摩川と玉川—古代地名由来考 [小野一之]
- ・府中宿における飯売旅籠の成立と営業形態について
[竹田真依子]
- ・江戸時代後期の遠馬と府中 [花木知子]
- ・人生の年譜と—〇〇枚の写真
—大室智夫ライフヒストリー(三)—
[大室智夫・佐藤智敬]

＊府中市郷土の森博物館ブックレット22 300円
『中世東国と年号』

2019年7月から9月にかけて開催した企画展「中世東国と改元」の内容を増補。中世の東国の人びとはどのように改元を知り、年号に対してどんな意識を持っていたのでしょうか？ 発掘調査で出土した「福德」という私年号の板碑を入口に、年号の世界へ分け入ります。



CONTENTS
prologue 中世東国と年号／
1. 改元はどのように伝わったのか？／2. 改元はどんなときに？／3. 改元を認めない！改元を知らせない！／4. 改元の期待がデマを呼ぶ！／epilogue 改元に変化を望む人たち

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です

資料をご寄贈ください！

博物館では、府中に関わる資料を集めています。
博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。

昭和40年代以前の家電製品／府中にかかわる古写真／養蚕や信仰にかかわる資料／府中で出土した土器や石器など



★「あるむぜお」は定期購読できます！★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料400円(切手でも可)を添えて、受付カウンターでお申し込みください。

※当館HPでも「あるむぜお」をご覧いただけます。



太陽系惑星ツアー



①水がないのにどうして「水」星？

今回から、「太陽系惑星ツアー」ということで、太陽系の惑星たちについて紹介します。第1回は、太陽系第一惑星である「水星」です。水星とは、どのような星なのでしょう？

一つ目の特徴に、「速さ」があります。水星は、太陽の周りを回る速度が秒速47.37kmと、太陽系の惑星の中で最も速い惑星です。また、1周するのに88日間しかかからず、1年が一番短い惑星でもあります。惑星は地上から観測すると、日に日に星空を動いていくように見えますが、水星はその動きが一番速く見えます。

二つ目の特徴に、太陽との「距離」があります。地球と太陽の距離の約1/3ほどしかなく、太陽系の惑星の中では、一番太陽に近い惑星です。そのため、昼間の気温が最高で400℃ととても高くなります。しかし、夜間はとても寒く-160℃まで下がり、寒暖差の激しい惑星です。寒い極地には氷が観測されており、大気には少しではありますが水蒸気があることがわかっています。しかし、水星は地球のように水が液体として豊富にある惑星ではありません。それでは、なぜ「水」星と呼ばれるようになったのでしょうか？

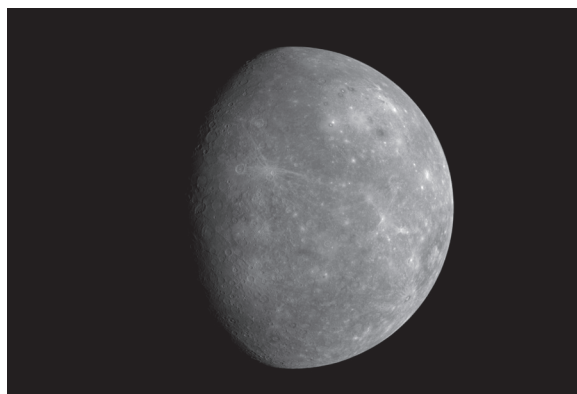
水星やその他の私たちの目で見ることのできる惑星の名前は、古代中国にあった考えの「五行説」に由来します。五行説は、あらゆる物が、五つの要素、「木」「火」「土」「金」「水」で構成されているという思想です。また、それぞれの要素には、対応する色があり、木→青、火→赤、土→黄、金→白、水→黒とされています。五つの要素の特徴や対応する色から、肉眼で見える5つの惑星の名前が付けられました。

1年を通して動きが一番速い惑星は、流れ動く「水」の要素を司り、「水星」。一番白く輝いている惑星は、「金」の要素を司り、「金星」。

赤く見える惑星は、「火」の要素を司り、「火星」。残る2つの惑星のうち、より黄色い惑星は、「土」の要素を司り、「土星」。残った惑星は、「木」の要素を司り、「木星」と名付けられました。

このように惑星の名前は、望遠鏡がない時代に地上から動きや色などを肉眼で観察し、それに「五行説」を関連付けたものです。今では観測技術が発達し、惑星に探査機などを飛ばして、惑星の表面の様子や気温、自転・公転周期、磁場の様子など、目で見てわかること以上の様々な情報が得られるようになりました。そして現在、水星には、日本の探査機「みお」とヨーロッパの探査機「MPO」が向かっており、2025年12月に水星周回軌道に入る予定です。2つの探査機により、今後新たな水星の姿がわかるかもしれません。それらの詳細な情報も踏まえて考えると、どのような名前を付けるのがよいのでしょうか？ みなさんなりに、水星の名前を付けてみても楽しいかもしれませんね。

(村井太一)



水星の写真

提供：NASA/Johns Hopkins University Applied Physics Laboratory/Carnegie